

## 張仲景の「医聖」称号に於ける段階的構築

——一〇六五年〜一九四九年——

余 新忠(翻訳) 上枝 恵莉子

張仲景は、現代中国ではよく知られている人物であり、多少知識のある人ならば、誰もが彼は中国の「医聖」であると知っている。張仲景のこの一称号に対し、今の人々は彼が「医聖」として讃えられた事を至極当然の様に認めている。まさしく彼は医学界の崇高な地位にある為、歴代、張仲景及びその傷寒論の討論に対しては書が絶えず、今日に至り、張仲景の研究成果に関して、所謂その夥しい先行研究を挙げれば、もはや大げさに言うべき所は無い(一)。しかしながら、既に近代以来の関連研究に言わせれば、ほとんどあらゆる探求は全て医学界(主に中国医学界)の研究者によつて為され、歴史学者はほとんど足を踏み入れていない。現行の研究は、基本的には全て、張仲景の生涯と事蹟に関する考証研究、『傷寒雜病論』の版本に関する文献学研究、『傷寒雜病論』の理

論や方法に関する処方薬研究、及び、張仲景学説に関する臨床の応用と実験研究等、四つの方面に集中している(二)。他でも無く本稿と関連するのは前者二つの方面である。特に一つ目の張仲景の生涯と事蹟に関する研究について言えば、それら彼の生涯や事蹟に対しては多くの考証や論争がありはするが、ともすれば同業者への是認と偉人を尊崇する心理に基づくのか、歴史上の様々な張仲景像を浮かび上がらせるのに有利な記載に対しては、往々にして「確かにそうである事を信じ、虚実であるとは信じない」といった受け止め方が取られ、基本的には全て宋代から次第に形作られた人物像を取り入れたもので、張仲景に関する記載は社会の発展の流れに沿って張仲景像を繰り広げて来たと言えよう。そして、尚ほ歴史上、張仲景及びその傷寒論の論述に対して、

一つの知識の構築過程、歴史的視点を産み出す知識から張仲景を巡る認識と考察をしたと見做せる研究は今だ見る事が出来ない。その「医聖」の称号に関して、この一称号は宋代以降次第に追論されたと理解されているが、往々にして一種の歴史的な選択として、この称号の出現は張仲景の偉大さと崇高さを反映した視点に考察が上乘せられ出来上がったもので、この一称号に対する形成過程は歴史性の問題整理をするのに極めて乏しい(三)。ここから見える様に、目下、張仲景及びその傷寒論に関する学術的蓄積は既に極めて多く豊富であるが、研究者の学術背景と研究観点等の方向性に制限が掛かっている事により、探究の深度と範囲に関しては今尚お進展する領域が少なくないと言えよう。

張仲景の「聖化」の過程に対する考察を通じ、更なる張仲景、我々への一人物の基本的な姿を全面的に認知させる為の一助に止まらず、中国史上の知識が産み出され進展しながらも変化して来た歴史的過程と構造を俯瞰し考察させる機会を借りて、併せて一層の考察と探求が医学史の叙述に関して中医の知識を構築した影響と意義、及びこの中から反映された社会と文化の変遷の流れを汲み取る事にもなるであろう。

## 一 「医聖」称号の形成

中国史上、人物の「聖化」は比較的良好に見られる一種の現象で、その最も典型的なものとしては、無論、儒学が刻々と尊崇されるに伴い、孔子が絶えず「聖化」された事である。孔子の「聖化」は、漢代に始まり明代・清代まで連続と続き、国家はその諱に対して絶え間無く底上げを行い、孔子は最終的に「大成至聖文宣先師」となった(四)。「儒」と異

なり、「医」は、古代中国に於いて、取り分け宋代以前には、一種の技能が求められている「職人」として、「巫医藥師百工」の一種として見られている職業であった。儒者と異なり、医者は自然と儒者の主導によって描かれた「医書」の世界の中では尊崇ないし「聖化」され難くなる。

しかし、宋代以降、国家による医学への関心が段々と高まり、医者も自ら士大夫階層への接近を工夫し、「医者」と「儒家士大夫」の習合体である「儒医」が出現しつつあった。「儒医」は自身の「儒」でも、「医」でもある二重身分を顕現させ、「良医良相」の説法をも借用し、「儒」との同格化を望んでいた(五)。また、木版印刷術が発明及び一般的に応用されたことによって、つまり、知識の伝播が革新されるようになった時代の様相と相俟って、中国医学も今までに無い印刷物を媒介とする新境地へと突入した。宋代以降の医者は書物によって医学を構築し、その「医書」を一般の儒者も注目するようになり、時に談論の資にもなっていた反面、逆に印刷物に頼らない元々の医学は徐々に人々の視野から消えていった(六)。このような時代状況は、「医書」と、それを著した医者が尊崇ないし聖化され得る現実的な条件を提供したと言える。

実際、医者への尊崇と「聖化」は宋代以降に始まる。張仲景は宋代以前の正史の中には正式な列伝が存在せず、僅かな事跡が医学書に散見されるのみであり、世間ではあまり耳にしない人物であった。また、彼の著作『傷寒雜病論』は、西晋の太医令である王叔和によって再編纂されたが、完全にまとまっていたとは言えず、当時としては多くの処方本の中にある一種の流伝に過ぎず、影響力は大きくなかった(七)。しかし、その運命は宋代になり革命的な転換期を迎える。宋王朝が医学を相

対的に重要視し、医経整理事業を実施して大量の人力及び物力を投入し、引いては仁宗の嘉佑二年（一〇五七）に校正医書局が成立し、大量の医学書が校訂され刊行された（八）。治平二年（一〇六五）には、孫奇・林億などが再編纂した『傷寒論』が公刊された（九）。この『傷寒論』の出版は、当時の学界で大変な注目を浴び、傷寒学の研究が盛んに行われたと共に（二〇）、張仲景その人も次第に崇められ始めるようになったのである。

宋代以降に関して、張仲景が次第に尊崇され「医中之聖」となるまでの大凡の過程は、目下、医学史学界のいくつかの研究に於いて既に論究されているが（二一）、これらの研究は、専門的な詳細研究ではなく、新聞上の文章として、論述も比較的簡略なばかりか、その上更に重要な懸念は、それら全てはその関連記載が体系化された歴史言語の渦中に置かれて考察と認識を加えられなかった事である。従って、我々の歴史に於いて、その尊崇と「聖化」された過程について考察や認識を行う事は不利である。

今の人が張仲景の「聖化」を論じる時、往々にして、まずは宋代の許叔微の言である。「論傷寒而不諱仲景書、猶為儒不知本有孔子六經也。」に話が及ぶ。許叔微（一〇八〇～一一五四）は宋代の著名な医学家で、このくだりは現存する許叔微の論著の中には見受けられないが、清代初頭の汪琥の『傷寒論辯証広注』（二二）の中に登場する。この書籍の具体的な成立年代は不明であるが、基本的には一二世紀前半頃と判定出来、もし真実これが許叔微の提言であるのならば、張仲景を喩える事が直接に聖人孔子と喩える事と同じ具合で、この隠された「聖化」を含む

言葉が一五〇年代前には既に出現していたという事になる。しかしながら、現在残された版本には汪琥のこの引用文は見られず、まだ依然として一定の疑問が残る様に思う。しかし、北宋代後期より既に出現していた「医」と「儒」を比定する状況及び成無己などの人の見解を鑑みれば、許叔微がこの様な議論を発するのにも可能だと取るべきである。

成無己は、一一五六年に成立した『傷寒明理論』に於いて、「惟張仲景方一部、最為衆方之祖（中略）実乃大聖之所作也（二三）」とし、張仲景が正に初めて「大聖」になったと認められたというのは、ここで張仲景が正に「大聖」であるかの様なニュアンスであった為である。三〇年後、著名な医学家である劉完素は、その名著『素問玄機原病式』の序言に於いて、「夫三墳之書者、大聖人之教也。（中略）仲景者、聖也。雖仲景之書、未備聖人之教、亦幾于聖人、文亦玄奧、以致今之學者、尚為難焉（一四）」とし、張仲景を直接「聖」と称している。

劉完素は、直接に張仲景の書籍を儒家の聖人の經典と同列には論じなかったとは言え、張仲景はもはや聖人に近く、それ故に「聖」であると述べた。彼の意図は、依然として張仲景はそれこそ医学中の「聖」であるとは言っていない様であるが、劉は特に張仲景の書籍を高く評価して医家の經典であるとし、医家を仮にも儒家の聖人と同等に見る事は出来ないの、ひとまずは張仲景を「聖」と呼ぶ事は出来るとした。ここに、「医」と「儒」を比定する意味が無いと言えない事も明らかになったであろう。

劉完素は、当時の医学界に重要な影響があった事から、張仲景が「聖」とあるというその見解に関しても、流伝される事になった。例えば、

金代・元代期の王好古が一二三六年に成した『陰証略例』の中にもまた「亜聖」として張仲景の名が登場する。王は「以此言之、則仲景大經之言尽矣。但患世之医者不知耳！此亜聖言簡而意有余也（一五）」と言っている。

ここから、一二〜一三世紀は正に張仲景が聖化された最初期段階であり、彼の地位は次第に尊ばれた。しかしながら、当時、張仲景と傷寒論の地位は、宋代以前と比べて飛躍的向上を見せ、また多くの医家に尊崇されていたとはいえ、まだ張仲景は医学界第一人者の立場にも至っておらず、明代・清代以降の医学界に於いて彼を王者の地位とする状況とは程遠い位置にいたとも指摘される。例えば、南宋代初頭の寶材は、『扁鵲心書』の中で、それを王叔和・孫思邈・朱肱などの人物と同列に論じているばかりでなく、また更に彼らを「皆不師『內經』、惟采本草書、各以己見自成一家之技、治小疾則可、治大病不效矣（一六）」と評している。言い換えれば、この種の尊崇と「聖化」の程度の高さは、つまり、これらは傷寒学を心から認めて崇める医者が「医」と「儒」を比定する過程の中で出現したと言えるが、それは医学界に於ける「聖化」の第一歩が確実に定まった事でもある。その後の数百年の中で、決して少なくない人々が称号上で彼に対する尊崇を推し進めるかの如く、一六世紀中期に至り、新しく第一次張仲景尊崇ブームと「聖化」運動が勃興する事となった。

既に手元で掴み得る資料を見れば、この張仲景の新しい「聖化」運動は、李濂（一四八八〜一五六六）の『医史』（一五四六）が嚆矢となる。

この書籍の成立年代は、一般的な紹介では全て正徳八年（一五一三）で

あると考えられ、この時、李は正に科擧試験の対策に忙しく、やる気と精力を置いてまでこの書籍を編纂した。錢茂偉は、その発見した新資料に基づき、この書籍が嘉靖二十六年（一五四七）に成書されたのは確かであると考えられる（一七）。李濂は、『医史』に於いて張仲景の為に伝記を立てており、劉完素の「亜聖」説を用いてそれに沿ったが、あくまで医学界の中に於ける地位という事を強調し、張仲景を「医中亜聖」としており、併せて正史に張仲景の列伝が立てられなかった事もまた大変遺憾であるとした（一八）。続いて、新安の医家であった徐春圃（一五二〇〜一五九六）は、一五五六年に成書した『古今医統大全』の中で、「張機、字仲景、南陽人、受業張祖伯、医学超群、举孝廉、官至長沙太守（中略）凡移治諸証如神、後人賴之為医聖（一九）」と言い、ここで初めて張仲景を直接「医聖」と称したのである。それに並び、多くの医学書に張仲景が叙述される際には全て「後世稱為醫聖」という記述が現れる様になった。まずは一五七五年に成された李梴の『医学入門』の中に見られた（二〇）、その後一五九四年に出版された方有執の『傷寒論条辨』の中にも登場し（二一）、更に一五九九年に趙開美により刊行された「仲景全書」の巻頭にも「医林列傳・張仲景傳」が立てられている（二二）。これらの伝記の中で、「後世稱為医聖」の語彙は、いずれも完全一致し、その他の内容も基本的にはほとんど変わらず、ただ『医学入門』の中の伝記のみ比較的簡略になっている。これらの書籍の中で、李梴の書は、『歴代医学姓氏』の内容に関しては『医林史傳』『外傳』及び『原医圖贊』（二三）を引くと述べている。これら幾種かの書籍は今日では全て既に散逸してしまっただが、目録書から分かる様に、前者二種類の書籍は明代

の新安の医家であった程伊が著したものであると知る事が出来る(二四)。程伊の生没年は、今はもはや判断としないが、我々はただ彼の『程氏釋方』が一五四七年に成書されたものと知るだけに(二五)、彼は明代の中期から後期、つまり一五世紀前半の人であろう。趙開美は、この書籍中にある『医林列傳』に記録され収められていた張仲景・王叔和・成无己の三名の伝記と『医学入門』の中に見られる彼等の伝記を比較対照するならば、内容は基本的には近似しているが、ただ後者の方は遙かに簡略であるとしている。しかしながら、『医学入門』の中にも『医林列傳』はあるが、門人である衛汎の情報は無い。『医林列傳』は今だ著作目録に見られない為、ここから我々はこの書籍が例えば程伊による二種類の伝記の合作であるかどうかを懷疑する理由がある様に考える。李梴の書籍の中にはより多くの内容が出て来たが、その多くは『原医圖贊』より典拠を求める事が出来る。仮にそうであるならば、「後世稱為医聖」この語彙はまず程伊の医学史の著作物の中に現れなければならぬ。一般論として、著者が医学史類に関する著作物を著す場合、それは医学専門書の出版より遅いとされる。そこで、『程氏釋方』の成立年代の推論を根拠にすると、その成立は李濂の『医史』にやや遅れる。程伊のこの一説は、まさしく彼と同郷である徐春園が著す「後人頼之為医聖」と呼応し、これを以て、医学界に張仲景の「医聖」という称号が確立するようになった。

その後、「后世被稱為医聖」という、この言葉が絶えず繰り返し使用されたばかりか、また「仲景医聖」、「医中之聖」と言った、このような表現も医学書の中に度々登場した。比較的多くの医学書の中に登場する

だけで無く、更にこれはその他の歴史書の中にも話が及び、例えば明代晩期の文人である何良俊は、「漢有張仲景、世稱為医之聖、盖以其深明『素』『難』、兼曉氣運也(二六)」と語った。

この様な一種の「聖化」運動の中、数多くの医家は張仲景に「追諡」を送ったのであるが、それは嘗て儒家と比定する意義を持つ「至聖」や「大聖」とは異なり、専ら医学界に於いてその立場を傑出させたのである。それに伴い、張仲景が医学界に於いて並び立つ者の無い地位が徐々に固められて来た。この時、人々は張仲景が傷寒学に止まらず、次第に整備が進められて来た医学界に於いても並ぶ者の無い崇高且つ至尊される地位にある人物と評していたのである。李梴の様な人は、「獨有漢長沙太守張仲景者、揣本求源、深微蹟隱、(中略)真千載不傳之秘、乃大賢至聖之資、有繼往開來之功也(二七)」と指摘する。また、清代の人は明代前期の人に対して、張仲景が劉完素、李杲、朱震亨などの人物と並び四家に列せられる事に深い不満を表し、乾隆年間の著名な医家である徐大椿は「此真无知妄談也。夫仲景先生、乃千古集大成之聖人、猶儒宗之孔子」と批評した。その他の人物は、ただ名医であるに過ぎないのに、どうして張仲景と並び称する事が出来るのか(二八)。ここから読み取れる様に、張仲景は医学界に於ける孤高なる聖人の地位にあり、既に不動の地位にいたと言えよう。しかも、一六世紀中期頃から始まった第二次張仲景「聖化」運動の使命は、ここに至り、事実上、その事業は遂に完成を見たのである。

しかしながら、指摘すべきは、張仲景の「聖化」は、歴代の医者によって歴史上の医家の伝記に次から次へと転写を重ねると共に、医学と

医学史を論ずる関連問題の過程は着実に完成を見せたのであるが、引いてはいかなる官側の正式な封典も無い為、「聖」の見解が実際にはただ張仲景を指すのかは不明確であり、明代晩期の王肯堂は、宋代の錢乙が、「小方脉之祖、医中之聖」とした事を挙げる(二九)。明代末期から清代初期の蕭京は、明代の名医である薛己が「一代医聖」とした事を述べている(三〇)。この他、張仲景に対する称号は「医聖」や「聖聖」があるが、不統一であり、人々は往々にして割合気の向くままに称号を使用し、李梴などは、伝記の中では張仲景を「医聖」と述べるも、後の論述部分では、「聖聖」と言っている(三一)。清代初期の著名な医学家である喻昌は、やはり張仲景を「聖聖」と述べている(三二)。清代初期以降、我々はその他の人が多少「医聖」と述べているのを散見するも、張仲景に対する称号が混在して使用される状況が依然として存在し、民国に至っても、依然この様な状況であり、例として一九三五年の中央国医館第二回全国医薬代表大会で為された「募捐重修南陽医聖祠」に関する議案の中で、やはり「聖聖」の表現方法について提唱議論が噴出し、「至張仲景撰『傷寒雜病論』而集其大成、尚論者推為方書之鼻祖、医宗之聖聖、歷代医家莫不奉為圭臬(三三)」と言われた。

## 二 「医聖」張仲景の生涯と事蹟の形成

一人の人間が一旦尊崇されると、その人物像を豊かにさせる為、崇拜者は必然とそれを構築する生涯や事蹟を極力掘り起こそうとする。既に前述したが、張仲景は正史に伝記が無い上、僅かに言及した記録さえ一切残されていず、その事績はただ一部分の医学書に散見されるの

みである。現存する資料を見ると、張仲景の最初の伝記は、唐代の甘伯宗の『名医録』の中に登場したはずで、現代の医学史では一般的にこの『名医録』を中国初の医史学書と見做す。惜しくもこの著作は既に早くに散逸してしまつたが、範行準の研究に拠れば、その基本的な内容は李杲の『医説』の一卷中に保存されているはずである(三四)。しかも、今日見る事の出来る張仲景の事蹟を紹介した文献で最も古いものとしては、治平二年(一〇六五)校正医書局によつて実施された彼の医書の整理・刊行の事業の際に、高保衡らが作成した序言である「張仲景、『漢書』無傳、見『名医録』云——南陽人、名機、仲景乃其字也。舉孝廉、官至長沙太守。始受術於同郡張伯祖、時人言、識用精微過其師(三五)」である。

この紹介の一文は『名医録』から来た事が明記されており、仮に範行準の虚言で無ければ、我々が『医説』の中の記載を見る妨げは無く、『医説』には張仲景の伝記の内容に関して以下の様にある。

後漢張機、字仲景、南陽人也。受術于同郡張伯祖。善于理療、尤精經方。舉以孝廉、官至長沙太守。後在京師為名医、于當時為上手、時人以為扁鵲、倉公無以加之也。

(出『何顯別傳』及『甲乙經』『仲景方論序』(三六))

この文章は高保衡などの人が記したものと基本的には同じ内容であるが、言葉遣いにはやや変化がある。当時、張仲景の伝記に関して、以上の二つの書籍を除けば、『歴代名医蒙求』にも記録がある。

『名医大傳』張機、字仲景、南陽人、受術于同郡張伯祖。善于理療、尤精經方。舉以孝廉、官至長沙太守。後在京師為良医、時人言其識用精微、過于伯祖（三七）。

『歴代名医叢求』は二二二〇年に成立し、成立年代は『医説』よりやや早い。上述で引いた文章から分かる様に、周守忠が収録した伝記は『名医大傳』に求められ、この書も今日では既に早くに失われ、範行準の考証に拠れば、この書籍は『名医録』の改題であり、つまり、『歴代名医叢求』と『名医録』の両者は系譜を同じくする一つの書籍である（三八）。更に上述に引用した二つの文章を見れば、十分に近いと分かる。しかし、そこにある情報も、他でも無く見識が精緻で、余りにも模倣が過ぎ、傷寒論の序言の中に同様の事が述べられている事から、『医説』の手落ちともされる。三者を照合すると、我々はこの幾種かの記述が全て『名医録』に拠るものと認識し、著者は、収録の際に全てをそのまま完全に収録したのではなく、取捨選択と改変をして省略した所もあるであろう。

高保衡らが序言で書いたこの紹介文は短いにも拘わらず、張仲景の人生の基本的内容が備えられており、出身地、名と字、功績や官職、医学の師弟関係と成立などの情報が全て含まれている。その中の大多数の情報は、今日現存する書籍中から根拠を見出す事が出来る。但し、高潔で孝行な振る舞いや長沙太守への任官等の内容は、今日現存する宋代以前の文献にある為、蜘蛛の糸を辿るかの様に探し出す事が困難

であり、未だに解決困難な件として休まず議論がされている（三九）。その功績と官職の叙述の歴史的根拠に関しては、今日もはや探求と考証は難しく、判じる方法が無い人がどの様にして加えてこの様な情報を積み重ねるのか。その為、その存在に対しても完全な立証と虚偽は立て難い。しかし、いずれにせよ、宋人の記述により、既に張仲景の人生や事績をほぼ明らかにする事は成功した。

その後、人々が張仲景の人生や事績を語る時、表現は異なるが、内容的にはこの枠を超えていないと言える。一六世紀中期、張仲景の第二次尊崇ブーム及び「聖化」運動の勃興に伴い、張仲景の人生や事績の内容には進歩が見え豊富になった。李濂はそれを一五四六年に完成させた『医史』の中で、初めて張仲景の為にそれまでと比べてほぼ完全に整えられた伝記を著している。この伝記は、本文が四二〇文字余りで、加えて凡そ六〇〇文字余り（四〇）の編者の注釈がその後ろに付き、それは大体中国医の中に於ける「亜聖」の伝記の規模と一致する。李濂が一介の学者として、自身が補足した伝記は、彼が付け加えた数少ないコメント以外には、殆どが引用したものであった。そこで述べられる張仲景の事蹟は、前述した『名医傳』の中の内容を除く他に、『何顛別傳』『針灸甲乙經序』の中の内容を一層補足して来るものであり、具体的事例が増加された。その他にも、張仲景が著した『傷寒論』と『金匱要略』の事を言及している。全体の上では非常に的を得ている事がよく目立ちながらも、これらは一定の基礎の上に基つき自ら構築したものである。これは比較すると以下に挙げる一句、「探蹟鉤玄、功伴造化、華佗讀而善之曰——此真活人書也。」の中に具体的に表されている。前半の二文は

明らかに自身が下した評価であり、後半の二文は詰まる所、事実に対する見解であるが、この当の事実は何処から来たものであろうか？考証に拠るならば、この書籍の最初の出典元は、『後漢書』と『三国史』の中にある「華佗伝」に基づいたものであり、その中で語られる「佗臨死、出一卷書與獄吏、曰、「此可以活人。」吏畏法不受、佗亦不強、索火燒之(四二)」という文面から分かる様に、華佗が言う「此可以活人」は、華佗自身の書を指し、『傷寒論』とは微塵も関係がない事が大変明確に見て取れる。華佗と張仲景の間に関連性を引き出そうとすれば、孫奇が新たに刊刻した『金匱要略』の序文に著した時に作られた、「臣奇嘗讀『魏志・華佗傳』云「出書一卷曰、此書可以活人。每觀華佗凡所療病、多尚奇怪、不合聖人之經。臣奇謂活人者、必仲景之書也(四二)」という一つの仮定を用いた推論に依らなければならぬ。

これに拠り、張葢は、一一一年に朱肱の『類證活人書』の序文を著した時、「華佗指張長沙『傷寒論』為活人書、昔人又以金匱玉函名之、其重于世如此(四三)」と敷衍した。孫奇が立てた仮説による推論は、ここに至って事実と変わり、李濂が更に一歩進めて、華佗が傷寒論を称賛したという、この仮説であった「事実」をストーリー化したのである。この様にして、後世の人々が張仲景の伝記を必ず引く際の「史実」が成立した。

ここで見られるのは、李濂により敷衍された伝記を通じて、張仲景の事績が更に豊富さを増したと同時に、その偶像も輝かしく見られる様になったという事である。ここから、張仲景の一層の尊崇と「聖化」の為に重要な素材を提供し得たとも言えよう。

時を同じくして或いはやや後に、嘉靖年間に編纂された『南陽府志』と『鄧州志』は張仲景の列伝を立て始めた。続いて、崇禎年間の『長沙府志』にも張機が東漢の郡守の中に入れられ、その列伝が立てられた。更に、清代に編纂された『南陽府志』『南陽縣志』『鄧州志』『襄陽府志』『長沙府志』等の数多の地方志には、基本的には全て郷賢、方技、名宦という項目に基いて伝が立てられ、その中で、光緒年間の『南陽縣志』の記載が比較的詳しいが、内容は基本的に李濂の伝の域を出ない(四四)。これら地方志の中の伝記は、張仲景の事蹟に新しい素材を付け加えたとは言えないが、著名人の伝記の整合性に関して言えば、重要な役割を果たしたのは十分に明らかであり、その上はつきりと表されている通り、その影響は医学界に溢れ出、地方の郷賢もしくは名宦になったのである。同時に、後世の人に、更に張仲景に事蹟に関して、各分野に亘る包括的な支持を手に入れられたとも思わせた為、一層信頼される様になった(四五)。

その後、一九世紀中期まで、著名な傷寒学家である蘇州の陸懋修が再度張仲景の補伝を著した。彼は『後漢書』の書式を真似て、更に数多の医学書等の資料を参考にし、二〇〇〇字余りで明快且つ充実に述べ連ねている(四六)。それは李濂が著した伝記と比べ、増補された部分には、多数ある自身の論評を除く他には、張仲景の医学的主張に関する陳述と議論が中心であった。張仲景の人生及び事蹟に関しては、李濂に比べ事実の増文は無かったが、美辞麗句のみが増していただけである。例えば、そこに述べられる「舉孝廉」の後には、「在家仁孝、以廉能稱」と言っている。また、例として、その官職が長沙太守になった後で言う



事には、続いて「在郡亦有治跡」を書いている。そして、最後、その称号を言う時には、「時人為之語曰、医中聖人張仲景」と言った。これら書き連ねられた文章また美辞麗句は、根拠が無い事が明らかであり、著者は伝記主人公の尊崇に対しては、推量で書き出したのである。しかし、これらもまた、後世の人が一層派生し述べ連ねた為に、根拠と糸口を提示する事となった。

民国に入り、張仲景の伝記は更に多くの人によって書かれた。例えば、孫鼎宣・章太炎・黃謙・郭象升などがあるが（四七）、その中で最も著名なものは、黃謙の『医聖張仲景伝』である。黃謙（一八八六—一九〇〇）は、近代の傷寒学家で、張仲景を極めて崇敬していた。黃謙が著した伝記は、李謙の伝や陸懋修の伝よりも内容が豊富になり、採集された資料の範囲も更に広がり、本文の内容は陸懋修が著したものより多くは無いものの、一文毎の論述に全て文献の依拠となる出典と注が加え付けられた為、その注釈文は本文よりも多くなった。張仲景自身の生涯や事蹟から言えば、この文章に新しく補足はしていないが、清代初頭に南陽の医聖祠に置かれた情報及び張仲景の二大弟子である杜度や衛汎の状況が加えられた。この黃謙が著した伝記は、張仲景の「医聖」の事績に更なる補完をさせた他にも、出典が挙げられ「歴史的情報源」がほぼ完全に整えられた事によって、張仲景の事績に対する信用度が更に高くなり、更には現代の學術規範にも符合する事になった。以上の様に、張仲景に関する事績の描写は、もはや現代の方式へと転化される事に成功した。現代の我々が多く認識している「張仲景」は、正に以上の多様な補足によって、「張仲景像」の形成基盤を与えられたと説明出来るで

あろう。

上述を総括すると、我々が比較的肯定する事が出来るのは、張仲景が漢代末期に一人の偉業を達成した医師であり、その上、現代に生きる我々が理解する様々な人物像があるという事である。著書にある「集医哲之大成」である『傷寒雜病論』は、華陀でさえも非常に感服し、一人の「医聖」となり、人柄としては仁愛と孝道の人とされ、官吏としては高潔且つ有能であり、甚だしい能吏の名声から諸々の政蹟を修めるが、その事実は、つまりは医学界に於いて絶えず尊崇と「聖化」が起る張仲景の過程の中で、歴代の医家が繰り返し伝記の転写を通し、張仲景の伝記を収録及び補足し、張仲景を尊崇する心理的作用の下で、意識的であろうと無意識にであろうと、段階的に累積形成したのである。

### 三 祭祀の出現と変遷

中国伝統社会に於いて、凡そ崇拜される著名人は官民両方の祭祀体系によって祀られる伝統がある。既に現在見て来た様に、張仲景も例外ではない。当世、南陽の医聖祠は土地の規模が広く、国家文物保護単位である「医聖祠」に並べられ、その上、各地に尚お存在する薬王廟の中では、しばしば主神として或いは副祭祀として祀られていた。少しの疑問も無く、この種の構造も歴史の進行過程の中で次第に形成した。張仲景は一体いつ人々にとって祭祀の対象となったのか？もし既に民間で言われて来た様ならば、その祭祀体系は、元来は複雑に入り組んでいる事、加えて資料が欠けている事から、考証が非常に難しいが、対して官側の祭祀は、大凡の痕跡を追う事が出来る。歴代に亘り、官側は医学に

関わる人物の祭祀に着手して来ており、三皇廟に始まり、三皇の祭祀は唐代に始まったのであるが、医薬神としての三皇の専門祭祀は元代に出現し、元代初頭に朝廷の勅命により各地に三皇廟が建設させられ、各地に於いて医学を振興する政策と互いに組み合わせる事で完成を見た(四八)。三皇廟は、主神である伏羲・神農・黄帝などの三皇の他に、更に十大名医を一緒に祭り、彼らは皆、桐君など上古時代の人物であり(四九)、そして張仲景はこの中には含まれなかった。明代になると、地方に於ける三皇の祭祀は、明代初頭には既に廃止され、京師の三皇廟も「先医廟」・「聖医廟」・「景惠殿」等と改称され始め、また祀られる神にも変化が生じ、嘉靖年間に景惠殿に並べられ、かつて祀られていた者は一〇人から二八人に増員し、その中にも無い張仲景が含まれた(五〇)。ここより、張仲景は既に正式に官側の祭祀に組み込まれたが、同時に相変わらず主神にはなれなかった。他の一面では、明代に地方の三皇祭祀が廃止になったとは雖も、この種の祭祀は民間では依然として留め置くことが出来、併せて民間の医薬信仰と互いに融合し、各地の一貫した葉王信仰の体系に止まらず形成され、そして張仲景は多くの薬王廟または三皇廟などの祠廟に並べられる事となった(五一)。

見るに、一六世紀中期の医学界に巻き起こった第二次張仲景「聖化」運動の最中、張仲景その人も官民の祭祀体系に徐々に取り入れられ始めたが、その時はまだ主たる祭神になっておらず、更に祭祀に必要な専用の祠もなかった事は明らかである。この様な状況は清代まで続いたが、医聖祠と張公祠の出現によって一変し始めた。

南陽の医聖祠は、張仲景墓と同時に建立された。この祠堂と墳墓の創

立に関して、現在、根拠とすべき主要な資料は三点ある。馮應鰲の『張仲景靈應碑記』、桑藝の『張仲景祠墓記』及び根拠となる前述の二つの文章を収録した徐忠可の『張仲景靈異記』である(五二)。典拠であるこれらの文献を見て分かる様に、張仲景祠と彼の墳墓が一つの新しく創造された「古跡」として、それを文化財の歴史性と見做せるのは、張仲景の靈魂を通して物語られ実現されて来たという点である。具体的な経過は大凡以下の通りである。

明代の崇禎元年(一六二八)四月に、河南省蘭陽県の馮應鰲という生員が偶々傷寒病にかかり、忽ち重篤に陥った。幸いにも張仲景が示現して夢の中で彼に治療を施した。その見返りとして、張仲景が自分の埋没した墓を探して保護してくれるように頼んだ。

病が回復した後、馮應鰲が張仲景の指示に従い、南陽に出かけ古跡を探したところ、三皇廟という所に夢の中の張仲景とそっくりな塑像を見つけた。廟の後ろには古墳もあったが、その碑文が記すには、明代初期に人為的に破壊され、地主である祝丞という貢生の野菜畑になったという事である。馮は三皇廟の土地を所有している祝家の人々に事の粗筋を話したが、真実として受け止められなかった。仕方が無く、馮應鰲はその場所の位置を記す事だけして帰ってしまった。四年後、祝がその野菜畑で井戸を掘っていた時、石碑が現れたが、不吉と恐れて封印してしまう。また一〇年が経ち、清代の順治五年(一六四八)に、馮應鰲が叶県の訓導に委任された。叶県は南陽に属するので、馮應鰲が張仲景の墓を回復しようとして動き始め、時の南陽府承であり、仲景と同じ張姓である張三異の支持を得て、また地元の郷紳の支援金によって、ようやく

順治一五年（一六五八）に張仲景の墓が修復された。併せて、その祠堂が建てられた墓の三間の背面には、「重門殿廡、冠以高亭、題曰—漢長沙太守医聖張仲景之墓（五三二）」とある。

張仲景の祠堂と墳墓の創建は、基本的には民間による行いではあるが、併せて公式に与えられた称号である「医聖」の名は、張仲景の「医聖」の地位の確立に対して、疑いの余地無く大いに有益な助けとなった。馮應鰲などのような人は、張仲景の示現の物語を通し、医聖祠という新しく創造された「古跡」の特異性を氷解し、併せてその歴史性を付与させたのである。張仲景の史跡が更に豊富に補充させられるだけでなく、そうある様に「医聖」の地位に相応しい祭祀をもした事で、後世の人々に張仲景の「医聖」の偶像と張仲景の人間像を一層固定化させた。

医聖祠と墳墓の建立後、その規模は絶え間無く拡大し、康熙年間には儒医が四八〇畝余りの田畑を寄贈してもらい、民国前になると、この祠堂は既に祭祀をする土地面積が六〇〇畝を擁する事になった（五四）。

然れども、民国に入ってから後、祭礼の土地は政府によって教育基金として没収され、祠堂と墳墓は一九二八年に石友三の軍により損壊の憂き目に遭った。一九三二年から開始した、郷紳である水子立及び黄濂といった医学界を代表する人間は、全国で巻き起こった国医運動の背景下で、中央国医館の力を借り、対策を講じて政府から祭殿の土地を取り戻し、同時に祠堂と墳墓を修繕しようとした。この件は数年をかけて政府と渡り合うも、結局の所、円満な解決を勝ち取れなかった。一九三四年、ある道士が自身の力で大殿及び西廊の修繕を募り、一九四〇年、再び朱玖瑩により更に修繕が提唱された。一九四九年後、国有として接收され、

一九五六年、一九五九年と一九八〇年代に、幾度も修繕を重ね、現在の規模に建てられ、併せて一九八八年に「全国重要文化財保護部門」に並べられる事となった（五五）。

この他、張仲景の任官地と考えられる長沙では、次いで崇禎年間に編纂された『長沙府志・郡職編』に張仲景が記されているが、乾隆年間の『長沙府志』はもう一步進んで、彼を専門的に祀っている「張公祠」も記載している（五六）。また同治年間の『長沙縣志』は、これに対して比較的詳細な記録として以下がある。

張公祠、乾隆八年建、在賢良祠西。祀漢太守張機、（中略）嘉慶二年、因祠宇傾圮、知縣蔣紹宗奉府札、將拆卸接官亭木料并寧郷生員周勝烈捐資、重新修葺、祠宇一新。（中略）并着賢良祠僧看守。張公祠至今廢為民屋、尚未修復（五七）。

これを見ると、明代中期から始まり、張仲景が医学界の著名人、「医中之聖」として、既に地方では関心の対象になっており、その上それは長沙太守の説となり、多くの人が認める様になり、現地で誇りに思われ尊崇される人物となった。地方志中に立てられた伝は、取り分け張公祠の建立、この一点について十分に説明している。注意を引くのは、張公祠を建立したのは地方政府であるが、出資は民間からのものである為、張仲景は官民両方に祀られていると見て取れる。しかしながら、一側面を見てみると、張公祠の建立後、焼香や参拝は下火になり、乾隆八年（一七四三）に建立後、五〇年余りですっかり廃れてしまった。そして、嘉

慶二年（一七九七）に修築後、更に六〇年余りが過ぎ、同治初年になると、もはや廃れてしまつて民家となり、更には一つの祠堂として見た時、祀り方も比較的下火で、焼香の煙や蠟燭の火も鬩り、引いては祠堂を維持する力にも欠けてしまう結果になつていた。従つて、張仲景の所謂任官地であつた長沙の民間では、「医聖」としての彼はあまり広く認められていなかったのではなからうか。清代の晩年になると、医者の出資に依つて再び買戻され、改めて修繕された。民国に入つた後は、祠堂は他の使い方をされ、引き続き今だ張仲景を専門祭祀とした祠堂の存在ではあり得なかつた（五八）。

#### 四 結論と問題

以上の論述を通して、我々が見て取れる様に、宋代以来、張仲景を巡る尊崇と「聖化」運動は、（一）医聖称号の「追諡」と段階的定着、（二）生涯や事跡の絶間無い加上と人間像の美化、（三）祭祀の出現と不断の更新という、主に三つの方面に集約される。そして、他でも無く歴史の過程から言えば、この一大運動は大凡三つの時期に分けられる。一二〇—一三世紀に初めて出現し、一五世紀中期から一八世紀中期に一層の発展を遂げ医学界に於ける只一人の尊い地位の確立に至り、一九三〇年に改めてその存在がはつきり認められた。上述から、張仲景の「聖化」の過程の中では、張仲景が一人の歴史的人物であり「符号」として、その「医聖」の称号と意味合いがどの様にして歴史の発展に従つて段階的に積み重ねられ引き起こされたのか、はつきりと見て取れたであろう。今日、張仲景は、一つの職種を超越し、地域を超えた著名人というだ

けには収まらない。歴史上の張仲景は、總体的に言えば、その崇高にして卓越した人間像は、詰まる所、高い業界性と地域性を備えるが、管見の限り、明代と清代という近代の夥しい各種の史籍になると、医学以外の文献中には、張仲景は依然として極めて語られる事の少ない一人物である。中国全土の非常に多くの地域で張仲景に関する祭祀が執り行われているにも拘らず、ただ薬王廟の様な廟の中に限り祀られ、その上、主神として専門的に祀られている訳ではなく、その専門の祠堂はただ彼の故郷である南陽と、任官したと伝えられる長沙にのみ出現したが、その影響も知れたものであつた。事実上、張仲景の尊崇と「聖化」運動は、基本的には全て医学界の中で社会的地位を有する人間達によって推し進められたと言えよう。

ここまで、我々は既に大凡張仲景が「聖化」された歴史の筋道と基本的な特徴を明らかにした。しかしながら、一つの研究として、一層の問題もまた浮上して来ている。例えば、張仲景の尊崇と「聖化」運動は、何故上述した三つの歴史的時期に起こつたと言えるか？この一連の運動の意義と影響はどの様なものであつたか？それは中国医学の発展に対してどの様に形作られた類型を齎したのか？この一つの変遷過程は、またどの様な社会と文化の変遷の軌跡を遂げたか？この様な諸々の問題である。これらの問題に対して、筆者は既に幾つかの部分の考察を行ったが、ある一部の問題については正に探求の最中であり、紙面と時間には限りがあるので、暫く保留せざるを得ないが、今は後に回し、将来的には再び専門的に緻密な詳細研究をする事にしよう。

〔注〕

(一) 張仲景及びその傷寒に対する歴代の探究状況及び現代の相關研究に関しては、錢超塵・溫長路主編『張仲景研究集成・上下冊』（中医古籍出版社〔北京〕、二〇〇四年）を参照。

(二) 同前、一〇三三―三三頁。

(三) 「医聖」の形成過程に関しては、非常に少ない新聞上の文章でのみ論究されており、例としては、沙恒玉等『「医聖」の由来』（『中国中医薬報』、二〇〇九年二月一九日）がある。

(四) 孔子の「聖化」に関しては、林存光『歴史的孔子形象—政治与文化語境下的孔子と儒学』（齐鲁書社〔濟南〕、二〇〇四年）、李冬君『孔子聖化与儒者革命』（中国人民大学出版社〔北京〕、二〇〇四年）がある。国家が封賜した諡号の変遷は、董喜寧・陳成国『孔子諡号演變考』（『湖南大学学报』三期、二〇一〇年）五〇―一〇頁を参照。

(五) 儒医の段階的出現と儒医の心理と境遇に関しては、總体的な詳細研究として、陳元朋『南宋「尚医士人」与「儒医」—兼論其在金元的流變』（台湾大学出版社委員會〔台北〕、一九九七年）、Robert P. Hynes, *Not Quite Gentlemen? Doctors in Sung and Yuan*, *Chinese Science*, 1987, Vol.8, pp.3-44 を参照。「良医良相」説の提起及びその意義に関しては、拙稿「良医良相」説源流考論—兼論宋至清医生的社会地位』（『天津社会科学』四期、二〇一一年）一二〇―一二三頁を参照。

(六) 中国医学における一つの発展の趨勢に関しては、梁其姿『宋代至明代的医学』、『面对疾病—傳統中国社会的医療觀念与組織』（中国人民大学出版社

〔北京〕、二〇一二年）三二―二八頁を参照。

(七) 張仲景の基本的な史跡と傷寒論版本の流傳状況に関しては、前掲錢超塵・溫長路『傷寒雜病論』版本研究』（張仲景研究集成・上冊）三九―一八三頁を参照。

(八) 宋代の医療政策、医学関連制度並びに校正医書局の状況に関しては、李経緯・林昭康主編『中国医学通史・古代卷』（人民衛生出版社〔北京〕、二〇〇〇年）三二五―三三四頁を参照。

(九) 前掲錢超塵・溫長路主編『張仲景研究集成』一五頁。

(一〇) 宋代以降の傷寒学勃興の基本的な状況に関しては、傅延齡主編『張仲景医学源流』（中国医薬科技出版社〔北京〕、二〇〇六年）四四―六七頁を参照。

(一一) 前掲と同じく、沙恒玉及び劉道青の「南陽医聖祠「晋碑」質疑」（『中原文物』一期、一九八三年）三七―四〇頁等の文に全て論及されている。

(一二) 汪琬『采輯古今諸家傷寒書目』（『傷寒論辯証広注』上海衛生出版社〔上海〕、一九五八年）一〇頁。

(一三) 成無己『藥方論序』（『傷寒明理論・卷下』上海科技出版社〔上海〕、一九九〇年）三頁。

(一四) 劉素素著・孫桐校注『素問玄機原病式・序』（江蘇科技技術出版社〔南京〕、一九八五年）五頁。

(一五) 王好古著・左言富点校『陰証略例・韓祇和温中例』（江蘇科技出版社〔南京〕、一九八五年）四四頁。

(一六) 竇材輯・李曉霞・于振宣点校『序』（『扁鵲心書』中医古籍出版社〔北京〕、一九九二年）一頁。

(一七) 錢茂偉「李謙『医史』成于嘉靖二六年(一五四七年)

URL:[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_4dade78b0107f1wh.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_4dade78b0107f1wh.html)

(最終閲覧日:二〇一三年一月一〇日)

(一八) 李謙「張仲景補傳」《『医史・卷六』『統修四庫全書』影印上図藏明刻本、

一〇三〇冊) 二六〇～二六一頁。

(一九) 徐春圃編・項長生点校「歷世聖賢名医姓氏」《『古今医統大全・卷一』安

徽科学技术出版社〔合肥〕、一九九五年) 一五頁。

(二〇) 李樾著・田代華等点校「歷代医学姓氏・儒医」《『医学入門』天津科技出版社〔天津〕、一九九九年) 一八頁。

(二一) 方有執「傷寒論条辨引」《『傷寒論条辨』人民衛生出版社〔北京〕、一九五七年) 三頁。

(二二) 趙開美「医林列傳・張機傳」(張機撰・趙開美編『仲景全書』中医古籍出版社〔北京〕、一九九九年刻本・一九九七年影印)。

(二三) 前掲李樾著・田代華等点校「歷代医学姓氏・儒医」一五頁。

(二四) 丹波元胤「史傳」《『中国医籍考・卷七九』人民衛生出版社〔北京〕、一九五六年) 一三八七頁。

(二五) 程伊「程氏积方」(傅景華等編『中国医学科学院图书馆藏善本医書・八冊』中医古籍出版社〔北京〕、二〇〇一年)。

(二六) 何良俊「子二」《『四友齋從說・卷二〇』中華書局〔北京〕、一九五九年) 一八三頁。

(二七) 前掲李樾著・田代華等点校『医学入門』五五頁。

(二八) 徐大椿「医学源流論・古今・四大家論」《『徐靈胎医書全集』山西科学技术出版社〔太原〕、二〇〇一年) 一七四頁。

(二九) 王肯堂「心臟部二・痘瘡上」《『幼科証治准繩・集之四』人民衛生出版社〔北京〕、二〇一四年)。

(三〇) 蕭京「治驗医案下」《『軒岐救正論・卷五』中医古籍出版社〔北京〕、一九八三年) 四三一頁。

(三一) 前掲田代華「原道統說」五五頁。

(三二) 喻昌「太陽合陽明方」《『尚論後篇・卷四』万有生等校注『喻嘉言医学三書』江西科技出版社〔太原〕、一九八四年) 二九八頁。

(三三) 黃竹齋著・成莉等点校『黃竹齋医書合集・上冊』(天津科学技术出版社〔天津〕、二〇一二年) 一〇六七頁。

(三四) 范行準「名医傳的探索及其流變」(王咪咪編『范行準医学論文集』学苑出版社〔北京〕、二〇一二年) 四三〇～四四七頁を参照。

(三五) 高保衡・孫奇・林億「傷寒論序」前掲張機撰・趙開美編『仲景全書』。

(三六) 王旭光・張宏「三皇歷代名医」(張泉著・王旭光・張宏校注『医說』卷一)『中国中医藥出版社〔北京〕、二〇〇九年) 一三頁。

(三七) 周守忠「仲景良医」《『歷代名医叢求・卷下』人民衛生出版社、一九五五年影印一二二〇年刻本) 三四頁。

(三八) 范行準「名医傳的探索及其流變」、前掲王咪咪編『范行準医学論文集』四三四～四三七頁。

(三九) 張仲景が長沙太守をしたか否かは、一貫して医学史の学界に於ける一つの論争の焦点であり、関連論争の基本的な状況は、錢超塵・温長路『傷寒雜病論』版本研究、前掲錢超塵・温長路主編『張仲景研究集成』上冊』四七～四九頁を参照。

(四〇) 李謙「張仲景補傳」《『医史・卷六』『統修四庫全書』影印上図藏明刻本、

一〇三〇冊) 二六〇～二六一頁。

(四一) 范曄「方術列傳」(『後漢書・卷一一二』)、陳壽「魏志・方技傳」(『三國志・卷二九』)

(四二) 高保衡・孫奇・林億「金匱方論序」(張仲景著・胡菲等注『金匱要略』福建科技出版社(福州)、二〇一一年) 一頁。

(四三) 張蕺「類証活人書序」(朱肱原著・唐雪迎等点校『類証活人書』天津科技出版社(天津)、二〇〇三年) 五～六頁。

(四四) 地方志の中に於ける張機の傳記資料に関しては、劉世恩・毛紹芳・廖俊旭主編『張仲景全書・上編』(中醫古籍出版社(北京)、二〇〇七年) 四四頁・五四～五五頁、何時希『中國歷代医家傳錄・中冊』(人民衛生出版社(北京)、一九九一年) 六八二～六八三頁を参照。

(四五) 今、数多くの研究に於いて、張仲景が長沙太守であったか否かを検討する時、往々にして地方志の叙述を根拠として証明の妥当性を求めようとする。

(四六) 陸懋修「補後漢書張機傳」(『世補齋文集・卷一』)、方春陽編『中國歷代名医碑傳集』(人民衛生出版社(北京)、二〇〇九年) 一六～一八頁。

(四七) これらの伝記は林佳静・伍悦点校『張仲景及其著作考証』(学苑出版社[北京]、二〇〇八年) 七～二八頁、前掲錢超塵・温長路主編『張仲景研究集成・上冊』五二～六一頁を参照。

(四八) 元代三皇廟及び三皇廟と医学の關係に関しては、馬明達「元代三皇廟學考」(暨南大学中国历史文化研究所等編『暨南大学宋元明清史論集』暨南大学出版社(廣州)、一九九七年) 二七九～二九四頁、Reiko Shimno「Medical Schools and the Temples of the Three Progenitors in Yuan

China: A Case of Cross-cultural Interactions, *Harvard Journal of Asiatic*

*Studies* 67, no.1 (June 2007): pp. 89-133 を参照 (当該論文は院生である劉小藤によって提供され、謹んで深く謝意を申し上げます)。

(四九) 薛霏「元代三皇祭祀考述」(『元史論叢・一三輯』天津古籍出版社(天津)、二〇一〇年) 二二四～二二五頁を参照。

(五〇) 荣真「中国古代民間信仰研究—以三皇和城隍為中心」(中国商務出版社[北京]、二〇〇六年) 一七二～一七三頁を参照。

(五一) Yan-ling Chao: *Medicine and Society in Late Imperial China: A Study of Physicians in Suzhou, 1600-1850*, New York: Peter Lang Publishing, Inc., 2009. pp.70-74 を参照。

(五二) この三篇の文獻の内、前の二篇は、王新昌・唐明華主編『医聖張仲景与医聖祠文化・上』(華芸出版社(北京)、一九九四年) 一一九～一二三頁を参照。後ろの一篇は、林佳静・伍悦点校『張仲景及其著作考証』(学苑出版社(北京)、二〇〇八年) 一六頁を参照。

(五三) 清代初頭の南陽医聖祠の出現に関しては、劉凱が既にこの問題に関して書いた宗教と伝統医学の観点から見て検討した論文を参照。Xun Liu「Physicians, Daoists, and Folk Cult of Sage of Medicine in Nanyang, 1540s-1950s」, *Daoism: Religion, History and Society*, forthcoming.

(五四) 前掲王新昌・唐明華編『医聖張仲景与医聖祠文化・上』一二四～一二七頁。

(五五) 同前、一三九～一六〇頁を参照。

(五六) 乾隆「典札」(『長沙府志・卷一五』方志叢刊) 三二九頁。

(五七) 同治「秩祀二」〔長沙県志・卷一四〕方志集成 二二五〇頁。

(五八) 譚日強・禹新初・邱衍慶「長沙張公祠变迁志略」〔湖南中医学学院学报〕  
一期、一九八三年) 四九～五〇頁を参照。

(中国南開大学中国社会史研究センター・歴史学院)

(立命館大学大学院博士課程後期課程)

# 伊藤仁斎の古義学

稿本からみた形成過程と構造

丸谷晃一 著 元中部大学大学院教授

長年にわたる地道な稿本研究により仁斎の思想形成過程と、その思想構造の解明に取り組んだ政治思想史研究者・丸谷晃一の遺稿集。在外的発想、独自のアプローチにより、多くの学問的成果と「問われ続けるべき問い」を遺した著者の畢生の研究をまとめる。

〔主要目次〕

第一部 伊藤仁斎における「同一性」批判の構造 / 伊藤仁斎における「性善」論の構造 / 伊藤仁斎の「情」的道德実践論の構造 / 第二部 伊藤仁斎における「古義学」的方法の形成過程 / 伊藤仁斎における「道」秩序の構造 / 第三部 伊藤仁斎の人間観 / 伊藤仁斎の自我相異論の成立過程 / コラム 一「丸谷晃一さんと私」(ケイト・ナカイ / 田尻祐一郎 / 菅原光 / 片岡龍 / 大久保健晴 / 高懸卓 / 末木恭彦 / 刈部直) / 解説(高山大毅) / 解説(相原耕作) / 跋(かえて(澤井啓一))

●A5判 / 三二二頁 / 六四〇〇円＋税

1-3-00033 東京都文京区本郷1-28-36

03(3814)8515

URL <http://www.perikansha.co.jp/>

へりかん社